富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査
第3次調査概報

1998年3月

上市町教育委員会

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査
第3次調査概報

1998年3月

上市町教育委員会

序

上市町黒川上山古墓群は、平成６年に下水道管理用道路に伴う発掘調査で12世紀末から14世紀までの中世墳丘墓群で完全な形で今に残る全国でも希な遺跡であることが判明しました。町ではその重要性から道路の方線変更を行い全面的に遺跡を保存、同年12月には上市町指定史跡として後世に残すことにいたしました。

上市町教育委員会ではこの遺跡を次代に残すため保存整備する予定でありますが、その資料作成のための発掘調査を本年度より国庫補助を得て計画的に行うことにいたしました。

前回調査までの調査で遺跡のほぼ全体の調査を完了していましたが、今回は東側に広がる平坦面の調査を実施し、遺跡の全体像をより明確にするための発掘と測量調査をいたしました。

その結果、古墓群よりやや古いと思われる６基の墳丘墓、石列、礎石痕、石垣遺構、平坦面などの遺構が発見されました。このことは、古墓群が成立する以前にこの山中に寺または庵など墓群に関連する営みがあったことを示してくれました。

調査は、平成９年の８月から10月に行いましたが、この間に掘り出された資料が平安時代から、鎌倉時代の富山県を知るよすがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査に、数々のご指導とご教授を頂きました、文化庁記念物課、県文化課、県埋蔵文化財センターをはじめとする皆様方に心より感謝申し上げます。

平成10年３月

上市町教育委員会

例　　言

1．本書は、富山県中新川郡上市町黒川地内に所在する上山古墓群の第３次発掘調査報告書である。

2．調査は、平成９年８月21日から同年10月７日まで延べ32日間実施した。

3．調査対象面積は5,500㎡である。

4．本調査は、国庫補助金、県費補助金を得て上市町教育委員会が実施した。

5．調査事務局は、上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会（文化課・県埋蔵文化財センター）の指導を受けた。事務及び調査担当は、生涯学習課文化振興係長高慶　孝・同嘱託芳賀万里子が担当し、生涯学習課長山口哲夫が総括した。

6．遺物の整理、本書の編集・執筆は、調査担当が行った。遺物の実測・トレースは、調査担当が中心となり、後述する富山大学大学院生・学生が行った。

7．調査期間中、富山考古学会西井龍義氏、富山県文化課副主幹　関　清、富山県埋蔵文化財センター所長　岸本雅敏、同係長　池野雅俊・同主任安念幹倫の各氏の視察を受け、ご指導をいただいた。また富山大学人文学部教授宇野隆夫氏には調査期間中、現地も含めて数々のご指導、ご協力をいただいた。

その他調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義な指導・助言並びにご協力をいただいた。記して深甚なる謝意をしたい。

富山県埋蔵文化財センター主任斎藤　隆、久々忠義、橋本正春、立山町教育委員会社会教育課主事　三鍋秀典（順不同・敬称略）

8．調査参加者はつぎのとおりである。

金成淳一、戸簾暢宏、中島和哉、早川さやか、磯村愛子、遠野いずみ、真井田宏彰、広瀬直樹、渡辺樹、加藤美生、片桐清恵、山口欧志（以上富山大学学生）荒木智忠子、伊東藤一、伊藤森子、金子みつゑ、川上富美子、黒田キク、桑名マツエ、高城英子、高城富美子、高城惟子、田中フミ子、田中好巳、西川文一、平井文子、三輪光子、吉田盛太郎（以上作業員）

砂田晋司、瓜生日奈子（整理作業員　富山大学学生）太田朋美、川上富美子、酒井哲也、嵩内みき子、松井早苗

（整理作業員）

目　　次

序　文
例　言
Ⅰ　遺跡の環境 …… 1
　第１図　地形と周辺の遺跡 …… 2
Ⅱ　調査に至る経過 …… 3
Ⅲ　調査の経過と層序 …… 3
　第２図　遺跡周辺図 …… 4
Ⅳ　調査結果 …… 5
　１．遺構 …… 5
　２．遺物 …… 7
Ⅴ　まとめ …… 8
　引用・参考文献

第３図　遺構全図
第４図　遺構実測図
第５図　遺構実測図
第６図　遺構実測図
第７図　遺構実測図
図　版
図版１　黒川上山古墳群周辺航空写真
図版２　遺物実測図
図版３　遺物実測図
図版４　遺物実測図
図版５　遺跡遠景写真
図版６　遺跡全景写真
図版７　遺構写真
図版８　遺構写真
図版９　遺構写真
図版10　遺構写真
図版11　遺構写真
図版12　遺構写真
図版13　遺構写真
図版14　遺構写真
図版15　遺構写真
図版16　遺構写真
図版17　遺物写真
図版18　遺物写真
図版19　遺物写真
図版20　遺物写真
図版21　遺物写真
図版22　遺物写真
図版23　遺物写真
図版24　遺物写真

Ⅰ　遺跡の環境

黒川上山古墓群は、富山県中新川郡上市町黒川字上山に所在する（第１図・第２図・図版１）。上市町は、富山県の東南部に位置し、立山連邦に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西にのびる町である。西は県都富山市に接する。東は、標高2,998ｍの剱岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。

遺跡の所在地である黒川は市街地の北東にあり、上市川の支流、郷川上流左岸の標高65～70ｍの丘陵に占地する。この丘陵を東に辿れば、弘法大師ゆかりの地、護摩堂（ゴマン ドウ）にたどり着く、ここから尾根沿いに南へ辿れば、立山室堂越（タテヤマムロドウノッコシ）に行きつく。室堂は立山信仰の拠点であり、本遺跡のバックグラウンドでり、真言宗をはじめとする、修験道の霊場である。またこのルートの谷をはさんで東側には、「地獄の針の山」と立山信仰では称される剱岳を仰ぎ見ることができる。剱岳山頂からは、９世紀のものと見られる銅製の鐸杖頭と鉄剣（国指定有形文化財）が発見されており、修験道とのつながりが考えられる。本遺跡が黒川に占地したのは、偶然ではなく、こうした環境が、造墓するのにふさわしいものと考えられたからではなかろうか。

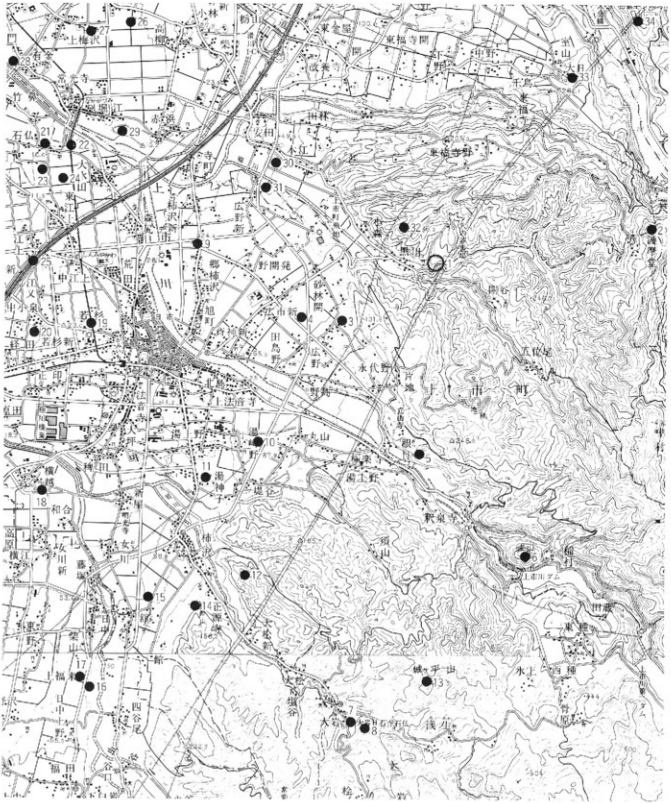
黒川村にあった真言宗本覚院の寺伝によれば、本院は、享保７年に僧、長玄によって開かれた。それ以前は、花崗山真興寺（真言寺院と考えられる。）があったが富山に移転したためその跡を継いだと言われる。真興寺は寛弘５年（1008）に真興上人によって現在の本覚院うら手の山中（字名は古寺）に開かれたものと言われている。真興上人は、寛和２年（896）に弘法大師止錫の護摩堂村弘法堂を参拝、その帰りに麓の黒川に立ち寄り、この地を八正道を宣布するにふさわしい地であるとして庵を結んだと伝えられる。これにより最盛期にはここを中心に、円念寺・浄土寺・正等寺、開谷には、源内坊・奥野坊・伴内坊・好田坊などができて、信仰の中心になったと言われる。黒川から護摩堂に至る道は、一部町道として残り、それに続く旧道も確認される（発掘調査以降改修中）。この道は、遺跡の南直下を通過し護摩堂川を沢づたいに延びている。また遺跡からは護摩堂地区が見通せる位置であることも確認できた。

町内及び郷川・上市川沿いの古代から中近世の遺跡を見ると市街地の南東に真言宗の古刹大岩山日石寺（磨崖佛・京ケ峰経塚　いづれも平安前期）、東に曹洞宗の眼目山立山寺（眼目山旧開山堂遺跡　鎌倉後期）などの寺院、市街地の南、立山町の日中玉橋経塚・日中東経塚などの経塚、さらに北部の上市川・郷川ぞいに文献上、古代から中世に登場する堀江保・小森保もしくは堀江の荘に関連すると見られる遺跡（江上Ｂ・東江上・上梅沢町・本江馬場田・横越の各遺跡）、さらに南北朝期に堀江荘に東国から荘官として入部し在地領主化したと言われる土肥氏（源頼朝の功臣土肥実平の末裔と言われる。）をはじめとする豪族の居館跡（蓑輪城跡・稲村城・郷柿沢館・有金城・堀江城・小森館・堀の内城・弓庄城・梅沢城・若荷谷山城）など数多くの遺跡が見られる。

上山古墓群が12世紀末から14世紀前半に造墓活動が見られ、それ以降造墓が途絶えることを前回調査で確認したが、南北朝期に入部した東国武士、土肥氏がこれに関与した可能性が考えられる。

土肥氏が14世紀はじめに越中に入部し勢力を拡大する中で、前記の城館を築くが、小森館・若荷谷山城・稲村山城などは、寺院を見下ろせる場所に築かれており寺院勢力に配慮した配置をとっているように見受けられる。また護摩堂から立山につづくルート上、標高約800ｍの山頂に千石山城がある。土肥氏入部以前の在地勢力がどのようなものであったか、堀江庄以前のおそらくは国衙領に属していたものと思われる本地域がどのように変化していったか、あらゆる角度からの分析が必要となる。

以上のように黒川上山古墓群の周辺遺跡は、古墓群の消長に深く関わったものと考えられ、今後、文献の調査・考古学的調査を深めることにより明らかにしていきたい。



第1図　地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

1．黒川上山古墳群，2．養輪城跡，3．広野D遺跡，4．広野C遺跡，5．眼目山旧開山堂遺跡，6．稲村山城跡，
7．日石寺磨崖仏，8．大岩京ヶ峰経塚，9．郷柿沢館跡，10．渭崎野西遺跡，11．湯神子B遺跡，12．柿沢城跡，13．茗荷谷山城跡，
14．郷田砦，15．弓庄城跡，16．日中玉橋経塚，17．日中東経塚，18．横越遺跡，19．若杉神田遺跡，20．中小泉東遺跡，
21．石仏遺跡，22．石仏鳴町遺跡，23．石仏南遺跡，24．大永田西遺跡，25．江上B遺跡，26．上梅沢町跡，27．上梅沢遺跡，
28．有金城跡，29．堀江城跡，30．本江馬場田遺跡，31．鵜山砦跡，32．小森館跡，33．堀の内城跡，34．水尾南城跡

Ⅱ　調査に至る経過

上市町黒川地内では、平成５年度に農業集落排水事業の管理用道路が計画された。しかしながら当該地区には上山古墓群の存在が知られており、それに伴う事前の発掘調査が行われた。しかし、調査が進む中で本遺跡が全国でも調査例の少ない中世墳丘墓群で墓数も40基を上回るきわめて良好な遺跡であることが明らかとなった。これを受けて上市町教育委員会は、上級機関の指導のもと、県文化財保護審議委員湊晨氏・奈良大学学長水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見を元に、町当局と再度協議を重ね、地元黒川地区からの保存要請もあり、全面保存の方向で合意した。その後同地内は平成６年12月８日町指定史跡として指定され、平成７年度には公有地化も計られた。

Ⅲ　調査の経過と層序

第１次調査（平成６年度本調査）

平成６年５月13日から同年７月27日までの延べ72日間で実施した。調査対象は1,500㎡でこのうち道路が計画された部分について遺跡の内容を確認した。

調査では、墳丘墓19基などの遺構、珠洲焼の蔵骨器、土師質土器（かわらけ）などの遺物が確認された。遺構と共搬する蔵骨器・土師質土器は、13世紀代のもので、この墓群の造営時期もほぼその年代に比定された。また、調査地区以外の部分においても16基以上の墳丘が視認され、全体で39基以上の墳墓が存在し、極めて良好に残存していることが明らかとなった。

第２次調査（平成６年度試掘調査）

平成６年９月９日から９月22日までの延べ11日間で県補助金を受けて実施した。対象は古墓群東側の山林約5,000㎡で、道路方線の変更に伴う事前の試掘調査として実施した。本年度の調査域はこの部分にあたる。

第３次調査（平成８年度本調査）

平成８年11月７日から同年12月17日までの延べ25日間で実施した。対象は平成６年度調査地区の南西で16基以上の墳墓が視認されていた部分、約1,500㎡で遺跡の内容を確認した。

その結果、墳丘・集石・五輪塔など45カ所の埋葬施設を発見し全体で70カ所の埋葬施設を持つ墓群であることが明らかとなった。出土遺物は、珠洲焼の蔵骨器のほか、輸入磁器・土師質皿、１次調査では１基しか発見されなかった五輪塔が現位置を保つもの２カ所を含めて６カ所で発見された。

なお、調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行った。

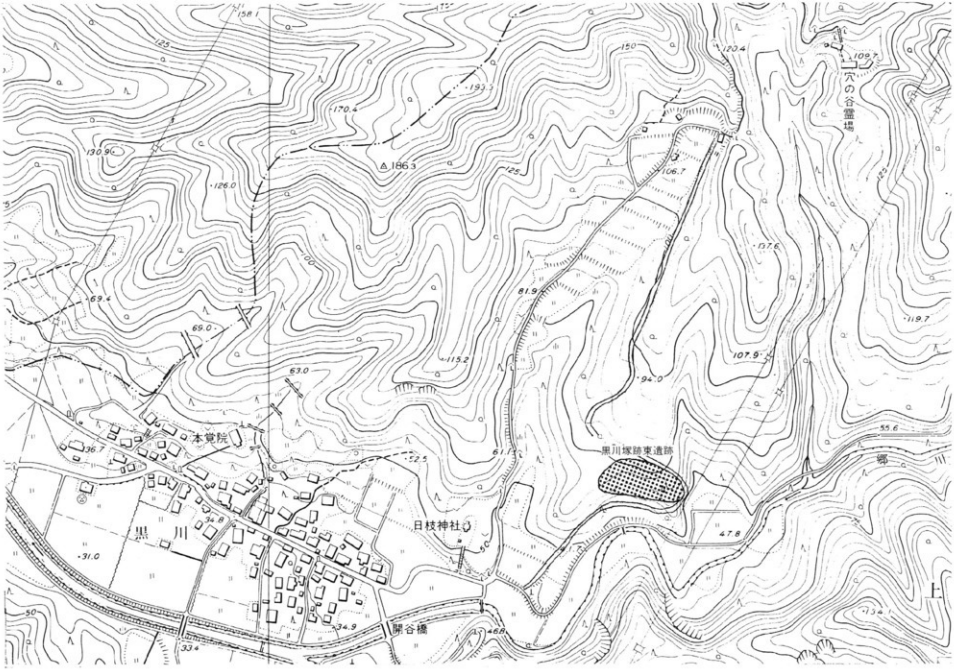
第４次調査（平成９年度本調査）

平成９年８月21日から同年10月７日までの延べ32日間で実施した。対象は古墓群東側の平坦面で、約5,500㎡で遺跡の内容を確認した。

その結果、平安時代のものと考えられる墳丘墓６基、平坦面10、掘立柱建物１、石列１、礎石痕５、石垣遺構１カ所、参道ないし墓道１カ所を検出した。遺物は明確に遺構に伴うものは検出されなかったが、８世紀から12世紀までの須恵器片多数を出土、併せて縄文上器、硬玉製品なども出土した。調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行った。

層位

遺構は、表面の落葉、雑草、腐植土（５～10㎝）を排除することで検出されるが、後世、畑地として利用されてお



第2図　遺跡周辺図 (1/5,000)

り所々に掘削を受けている。しかしながら墳丘は手つかづにのっこっており、礎石も移動はあるものの周辺で確認される。遺構面は、黄褐色土で、地山を削って墳丘が築かれている。

Ⅳ　調査結果

1．遺　構

調査により、調査区西側半分に遺構が集中していることが確認された。全体に畑の耕作により削平を受けているが、特に南東側半分は削平が大きく、遺構は検出されなかった。畑の耕作に邪魔であったと考えられる大きめの石は、X21400、Y79296付近に集められている。また調査区中央部には、北西と南西を分けるように段が設けられている。この段には拳大の石が張り付けられ、調査区の北西と南東の性格を異にすることを示している。調査区北西側には方形を意識した平坦面が検出された。この平坦面には遺構が検出されることが期待されたが、検出された遺構は建物が2棟であった。この他墳丘を6基検出している。また参道と考えられる面も検出した。平坦面・墳丘・東西の作り出し等の配置から、調査範囲が1つのまとまった空間として認識されていたと推測した。

墳丘（第3～7図、図版8・10～13）

調査区西半で6基確認された。1基は方形の区画の上部に築かれ、5基は楕円形を呈する。このうち楕円形で大型墳丘2は、その左右に小型の2基を配し、遺構全体のほぼ中央に位置する。また墳丘5は遺構全体の南西に位置し、小型の墳丘6は山道脇に位置する。

墳丘1（第3・6図、図版13）X21390～21398、Y79280～79288に位置する。山道を挟んで、平坦面2の前面に位置する。平坦面2の前面が方形に作り出され、その上部が東側に向かってやや高まっている。この高まりを墳丘1とした。方形の作りだしの規模は、裾部で5.16m×5.88mである。墳丘1の裾部は4.08m×2.44m、墳頂は2.2m×1.28mを測る。方形の区画から墳頂までの高さは約30cmである。主軸は、N54°—Wである。墳頂に径50cmほどの大きな石を4個配し、その周囲に掘り拳大の石が配される。方形の平坦面にも石が広がる。付近に多数の須恵器片が出土するが、主体部から確認されるものはない。平坦面2との境に後述する石列が確認された。

墳丘2（第3・4図、図版8－3、10－1・2・4）X21390～21396、Y79299～Y79305に位置する。平面形は楕円形で、北西側が高く南西が前面であることが意識されている。規模は裾部で6.32m×3.72m、墳頂で1.72m×1.2mを測る。盛土の高さは約70cmであるが、墳丘の築かれた面が北西に高く南東に低いため、墳丘前方から見ると盛土の高さよりも立派に見える。全体に掘り拳大の石を配する。遺構全体のほぼ中央に位置し、東側に墳丘3、西側に墳丘4を配する。遺構全体の中心部分であったと考えられる。軸方向はN48°—Wである。墳丘の前面には平坦面が作り出されており、石列が祭壇と考えられる高まりを作っている。南西側を半載したところ、墳丘に立っていた木が、立ったまま焼けた状態を確認した。そのため墳丘の主体部は攪乱を受けている。主体部からの出土遺物は確認できなっかたが、埋土中に須恵器・縄文土器を含む。また、主体部には多量の粘土が混入し、丸く焼けこげた炭化木も確認した。埋葬に関わるものと考えられ注目される。

墳丘3（第3・4図、図版8－3、11－1・2）X21397～21400、Y79303～79306に位置する。平面形は楕円形で、裾部の規模は2.44m×1.92mである。墳丘2の東側前方に配されている。墳頂の規模は1.56m×1.12mで、高さは約40cmである。掘り拳大の石が配される。墳丘上には木が立ち、内部は攪乱を受けていると考えられる。軸方向はN48°—Wである。主体部を断ち割ったところ、埋土から須恵器片を出土するが、明確な遺物は出土しなかった。主体部は、約30cmの円形の穴であった。

墳丘4（第3・4図、図版10－3）X21387～21390、Y79300～79303に位置する。平面形は楕円形で、裾部の規模

は2.48m×2.08m、墳頂の規模は1.0m×0.88mである。高さは約35cmである。墳丘裾に径50cmほどの石が存在するが、墳丘頂部から転がったものではないかと考えられる。また裾部付近に掘り拳大の石を配するがまばらである。軸方向はN48°—Wである。主体部は、径約40cmの穴で、明確な出土遺物はない。墳丘断面で主体部の堀廻が、確認できないことから、平坦面に穴を穿ち埋納その後墳丘を築いたものとみられる。

墳丘5（第3・6図、図版7－2、11－3・4）X21374～21379、Y79292～79298に位置する。平面形は楕円形で、西側部分が道路工事により削平を受けている。残存部分で裾部の規模は6.8m×2.88m、墳頂は3.64m×1.88mである。盛土の高さは40cmである。この墳丘も盛土された面が北西に高く南東に低いため、墳丘前方から見ると盛土の高さよりも高く見える。軸方向はN57°—Wである。主体部は墳頂部に径約1mの土壙を穿ち作られている。土壙内には人頭大の花崗岩と須恵器片が出土している。

墳丘6（第3・6図、図版12－1）X21380～21383、Y79280～79283に位置する。本調査区に西側から入る山道が通っているが、その山道沿いの北側に位置する。規模は裾部で2.88m×2.5m、墳頂で1.68m×0.96mである。高さは約40cmである。軸方向はN56°—Wである。

平坦面（第3～6図、図版7～9・12・14）調査区北西部に方形の平坦面を10カ所確認した。いずれも畑の耕作により削平を受けていると考えられる。平坦面は墳丘の前面を平らにしたものと、周囲の面よりも高く作り出し区画を意識したものとがある。特に平坦面1・9は周囲より高く作り出され目立っていたため、遺構の検出が期待された。しかし精査の結果、遺構は確認されなかった。建物の検出された平坦面2・6・8と、玉の検出された平坦面3について以下に記述する。

平坦面2（第3・6図、図版12－2・3）X21386～21394、Y79284～79292に位置する。前面には墳丘1、後方には平坦面1が位置する。平坦面2は約6m×約5.2mである。平坦面2の南東側には石列が並ぶ。石列は南東側の面が揃えられており、前面であったことを示している。石列からは、図版3－11の遺物を検出している。精査の結果、平坦面2からは2軒×2軒の建物跡が確認された。軸方向はN51°—Wである。平坦面2は南西ほど削平により低くなっており、柱穴の確認が難しいと考えられた。柱穴は直径約40cmほどのものである。

平坦面6・8（第3・5図、図版14）X21391～21406、Y79308～79320に位置する。平坦面6は4.8m×4.4m、平坦面8は約10m×約5mである。平坦面8の北側には平坦面9が一段高く造成されている。平坦面6・8・9は面的に関連していると考えられる。平坦面6・8からは建物の礎石として利用されていたと考えられる石を検出した。径80cmほどで扁平な面をもつものを平坦面6の南隅から、径60cmほどのものを平坦面6・8の境目から検出した。この礎石の間隔は約4.4mである。またこの約4m北東からは根石と考えられる集石を検出した。その他平坦面8からは北側で径60cmほどの石、南側で人頭大の石の集石を検出しているが、いずれも元位置を保ってはいないと考えられた。平坦面6・8からは須恵器甕の体部破片を検出している。

平坦面3（第3図、図版8－2）X21390～21398、Y79288～79296に位置する。建物の検出された平坦面2の北側で、墳丘2前面に位置する平坦面4の南側にあたる。精査の結果遺構は検出されなかったが、図版4の35～37の管玉が検出された。古墳時代のものであると考えた。

東側部分（第3図、図版8－1）X21400～21420、Y79318～79334に位置する。5段の雛壇状に整えられている。遺構全体の東隅に位置する。

西側部分（図版7－1）X21370～21384、Y79270～79280付近に位置し、当初調査範囲に含めなかった。しかし調査区東側部分に雛壇状の整地面が検出されたため、確認を行った。その結果、西側部分でも雛壇状の遺構が存在することが確認された。下草刈りを行っていないためはっきりしないが、段は3段以上とみられる。北側部分と南側部分が左右対称になっていると考えた。

石垣（第３・７図、図版15・16）Ｘ21372～21384、Ｙ79255～79265に位置する。谷部に西側から平坦面を作り出し、その北西方向と北東方向に石を積んだ面をもつ。石垣は北東部が約５ｍ、北西部は約４ｍである。これにより作り出された平坦面は、約５×30ｍで堂・廐などの建物が建つ可能性がある。石は径60cmほどのものが積み重ねられ、その石と石との間に握り拳ほどの石が詰められている。石垣により作り出された平坦面の西側隅には、径約３ｍの盛土がなされ、石が積まれている。平坦面に敷石されたものが、後代に集められたものと考えた。主軸の方向はＮ51°－Ｅである。

傾斜面（第３図、図版９－３）遺跡西側と、遺跡東側に傾斜面がある。遺跡西側は昨年までの調査で確認されている黒川上山古墳群の墓道とつながる山道に続く。墓群と今回調査の平坦面の間の谷にあり谷の上がり立て西に前述の石垣遺構がある。幅３ｍ長さ約30ｍを残し、残存部最低位と山道の比高差は約７ｍである。西側から入り、今回調査で確認した平坦面の前面を横切る。傾斜面の中程に集石が確認される。参道あるいは墓道と考えられ、今回の調査区に続く。東側はＸ21410～21430、Ｙ79305～79320で、幅５ｍ長さ約27ｍほどのである。平坦面９に向かってのびており、平坦面南側の縁辺を迂回するものとみられる。性格は定かでない。

２．遺　物

調査により検出した遺物は、縄文土器・土師質皿・瓦質土器・須恵器などである。縄文上器の出土はわずかであるが、墳丘造成以前は縄文時代の遺構が存在したものと考えられる。土師質皿・瓦質土器は小破片が得られたのみで、全体の器形が判別できるものはわずかであった。須恵器は墳丘の盛土上、墳丘周辺、墳丘盛土内から検出された。いずれも破片資料であり、墳丘造成の際に埋納されたものではない。そのため墳丘造成は、以下に記述する遺物の年代よりドるものと考える。以下図版ごとに特徴を述べる。

図版２・17・18・19

図版２の１～５は墳丘１からの出土である。１は須恵器の坏蓋であり、復元口径約15.0cmである。端部をゆるくつまむものの、外面に端面を形成するには至っていない。時期は９世紀後半から10世紀前半のものと考えられる。２～４は須恵器・甕の体部破片である。内外面にタタキ目と当て具痕が見られる。５は瓦質土器である。６～33は墳丘２からの出土である。６～26は須恵器である。６は坏蓋であり、復元口径約13.8cmである。１同様に端部をゆるくつまむものの、外面に端面を形成するには至っていない。時期は９世紀後半から10世紀前半のものである。７は坏蓋の天井部である。８は坏蓋であり、復元口径約14.0cmを測る。時期は９世紀後半から10世紀前半のものと考えられる。９は坏蓋の天井部で、外面にヘラケズリを施す。10は壺の口縁で、復元口径約16.0cmである。11～25は甕・壺などの体部破片である。26は壺の底部と考えられる。底部は回転糸切りで、張付け高台である。底径は5.8cmである。時期は９世紀後半から10世紀前半のものと考えられる。27は珠洲焼壺・甕類の底部で、復元底径約９cmである。28は土師質の皿である。復元底径約6.0cmである。29～32は縄文上器の破片である。29は外面に隆帯を貼付し、30は沈線を施す。31の縄文は無節のＬ、32は単節のＬＲが施されている。33は打製石斧である。石材は砂岩で、墳丘２の葺石として利用されていた。この他墳丘２からは、図版17①～⑰・図版18①～②・図版19①～③の土師器、図版17㉘～㉓・図版18③～⑬・図版19④～⑧の須恵器、図版19⑨の越中瀬戸、図版17㉔・㉕の縄文土器が検出されている。

図版３・19・20・21

図版３の１～３は墳丘３からの出土である。いずれも須恵器の体部破片である。この他墳丘３からは図版19⑩・⑪の須恵器、⑫の土師器、⑬の縄文土器を検出している。４～７は墳丘４から検出した。７は坏の底部破片で、張付け高台である。復元底径約7.0cmである。また墳丘４からは図版３　31・32の鉄製品と、図版19⑭～㉒の土師器、図版19㉔の須恵器を検出している。８～10は墳丘６から検出した。いずれも甕の体部破片である。内外面にタタキ目と当て

具痕が見られる。11は平坦面２の前面の石列から検出された。甕の体部破片である。12～20は平坦面２から検出した。12は須恵器・甕の口縁部である。復元口径20cmほどと考えられる。この他平坦面２からは図版20②・③・③～⑦の須恵器、④の土師器を検出している。21～28は平坦面１からの出土である。21は須恵器・甕の口縁部破片であり、復元口径約20cmを測る。22は須恵器・壺の口縁部である。復元口径は約28.0cmである。平坦面１からは他に図版21の①・②の須恵器を得ている。29・30は平坦面２から検出された越中瀬戸である。29は擂り鉢、30は皿の底部である。33・34は墳丘５から検出した縄文上器である。この他墳丘５からは図版20①の須恵器を検出した。35・36は平坦面２から検出した縄文上器である。35は隆帯と沈線を施す。37は平坦面２から検出した磨製石斧である。石材は蛇紋岩である。

図版４・21・22・23・24

図版４の１～３は平坦面３からの出土、４・５は平坦面４、６～９は平坦面５、10は平坦面６からの出土である。また11・12は平坦面８、13は平坦面９、14～16は平坦面７、17は平坦面10から検出した。いずれも須恵器である。14は坏の口縁部破片で、復元口径約14.0cmである。16は双耳瓶の肩部破片と考えられる。17は坏の口縁部破片であり、復元口径約15.0cmである。18・19は越中瀬戸で遺跡の東側部分、雛壇状の段から検出した。18は復元口径16.0cmである。19は皿の底部で、底径は13.2cmである。20～33は縄文土器破片で、平坦面・遺跡東側部分などからまんべんなく検出された。墳丘などが築かれる以前に縄文時代の遺構が存在したと考えられる。34はばち形の打製石斧である。石材は粘版岩で平坦面８から検出された。35・36・37は管玉である。36は穿孔されている。35には穿孔がなく、37は片面に穿孔をやりかけた跡がある。いずれも未製品である。35～37は平坦面３からの出土である。石材は蛇紋岩でいずれも古墳時代の遺物と考えられ、今回検出した遺構が築かれる以前に、古墳時代の遺構が存在した可能性がある。38～48は鉄製品である。38～45は釘状のものである。38・44の釘の頭は四角である。42・44・45は鞘の付着が多く原形を止めない。47・48は棒状の鉄製品であり、46は湾曲し突起を２つ持つが、いずれも何の一部であるかは不明である。この他、平坦面３からは図版21③～⑤の須恵器、平坦面４から図版22①・③の土師器、⑤の縄文土器、平坦面５から図版22②・④・⑥の土師器、⑦～⑨の須恵器を得ている。また列記するが、平坦面７から図版23⑥・⑦の須恵器、⑧の越中瀬戸、⑩の石材の剝片、平坦面８から図版22⑩～⑫・⑯の土師器、図版22⑬・⑭・⑰・図版23③の須恵器、図版22⑮の瓦質土器、図版23④の越中瀬戸、図版22⑱・図版23⑤の縄文土器を検出した。平坦面10からは図版23⑨の須恵器、東側の傾斜面から図版24①・②の須恵器、③～⑥の縄文土器、東側雛壇状の部分から図版24⑦～⑫の縄文上器、⑬の越中瀬戸を得た。

Ⅴ まとめ

前章までの調査結果を踏まえ考えられる点を整理しまとめとしたい。

1．今回の調査区は、上山古墓群と谷を隔てた東側に位置する平坦面である。平坦面は、後世の畑作で開墾された部分が多くあり必ずしも残存状況はよくない。しかしながら、平安時代以前ものとみられるの墳丘が６カ所で確認され、平坦面も10カ所中３カ所で礎石や建物の痕跡が確認された。

2．確認された墳丘は若干、後世の攪乱により改変したものも見受けられるが、墳丘１・２は、比較的残存状況がよく、１は方形の高まりの上に築かれた墳丘、２は山の斜面を利用し楕円形の墳丘を北から南に築く。２では墳丘前面に平坦地を設け、祭壇上の細かい柴石を持つ。明確な出土遺物は確認されなかったが、周辺及び盛り土中に８世紀から12世紀までの須恵器・珠洲焼を出土している。これらの墳丘は、古墓群より古いもの、少なくとも平安時代初頭にまで遡る古墓の可能性が高い。

3．礎石・建物が確認できる平坦面は2・6・8の3カ所がある。このうち平坦面2では南側に石列を配し、区画しており2間×2間の堀立柱建物を検出した。南側が正面となるものと考えられ、石列・道を挟んで墳丘1が配置されている。平坦面6・8では60×50㎝前後の扁平な自然石が十数個認められ現位置をとどめないものの、礎石と考えられた。これらの平坦面は墳丘のある平坦面と区分される。しかしながら平坦面と墳丘が同時に成立したか時期差があるのかは判断できなかった。

4．墓群と東側平坦面の間の谷に墓道ないし参道と石垣により作り出された平坦面が新たに検出された。谷間を利用し東側の平坦面に向かう道で、それを見下ろす位置に石垣積みの平坦面が配されている。ここにお堂・庵・廊などの施設があったものと考えると平坦面全体が、墓群に伴う施設の存在を暗示する。

以上であるが、今回の調査で検出された遺構は、建物の存在を示してくれたが、その規模、年代についての決定的な資料は検出されなっかた。しかしながら、付近に8世紀から12世紀までの須恵器・珠洲焼などが数多く分布するところから、何らかの施設が、上山古墓群成立以前からあるいは成立時にも存在した可能性が高い。

調査地の北東に現在わずかな水量しか流れていないが、滝と思われる比高差7ｍの崖を確認した。直下には径約1ｍの滝壺も確認した。今後付近一帯で広範な分布調査を行う必要がある。

次年度は1千年前に開山されたと伝えられる旧真興寺跡の比定地を中心に調査を行う予定である。黒川地区一帯が古代から中世前期に宗教的空間であった可能性が非常に高く今後さらなる調査が必要である。

引用・参考文献

ア　内堀信雄　1988　「須恵器甕類に見られる叩き目文について」『シンポジュウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』　報告編

カ　上市町教育委員会　1995　『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』

上市町教育委員会　1997　『富山県上市町黒川上山古墓群第2次発掘調査概報』

『角川日本地名大辞典16富山県』　1980　角川書店

タ　富山大学人文学部考古学研究室　1989　「越中上末窯」

中川成夫　1959　「越後華報寺中世墓址の調査」『立教大学文学部史学科調査報告4』

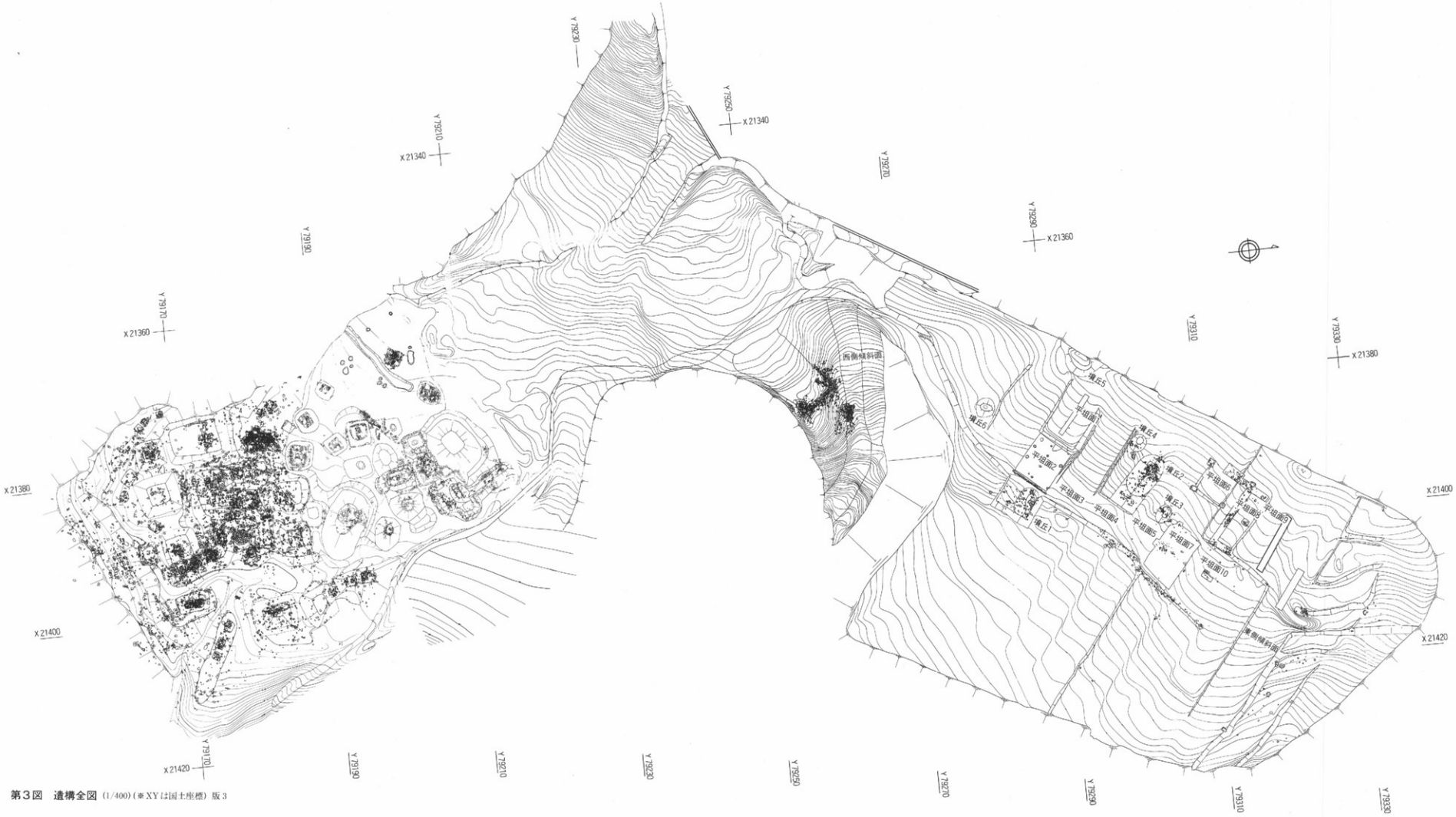
中野豈任　1988　『忘れられた霊場』平凡社

ナ　西井龍儀ほか　1993　『医王は語る－医王山文化調査報告－』福光町・医王山文化調査委員会

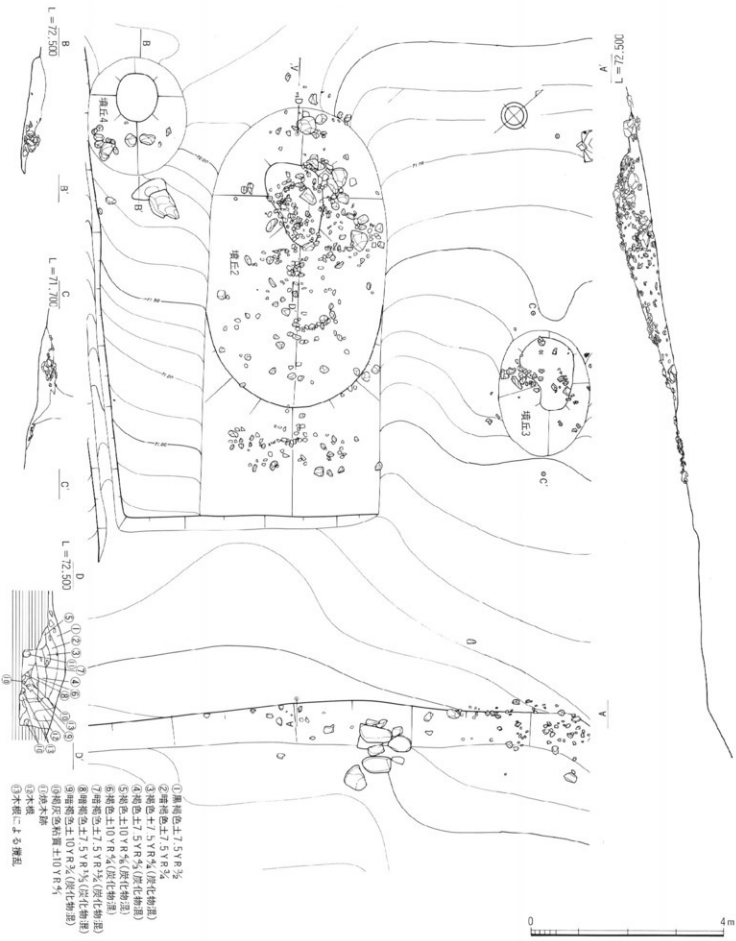
ハ　北陸中世土器研究会　1994　『中世北陸の寺院と墓地』第7回北陸中世土器研究会資料

マ　埋蔵文化財研究会　1983　「古代・中世の墳墓について」第13回埋蔵文化財研究会資料

ヤ　吉岡安暢　1991　『日本海域の土器・陶磁〔古代編〕－人類史叢書9－』六興出版

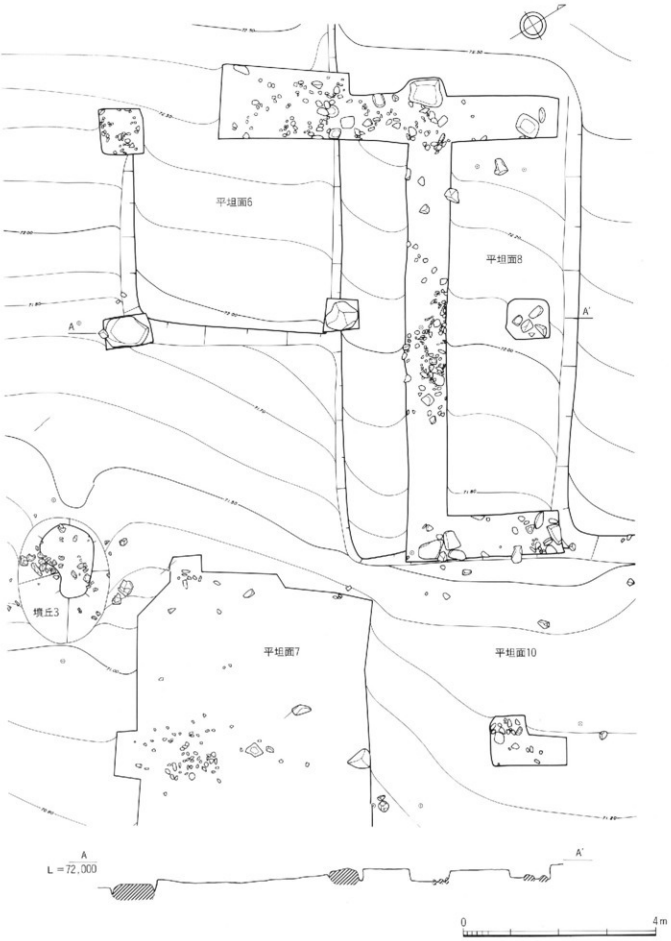


第3図　遺構全図 (1/400)(※XYは国土座標) 版3

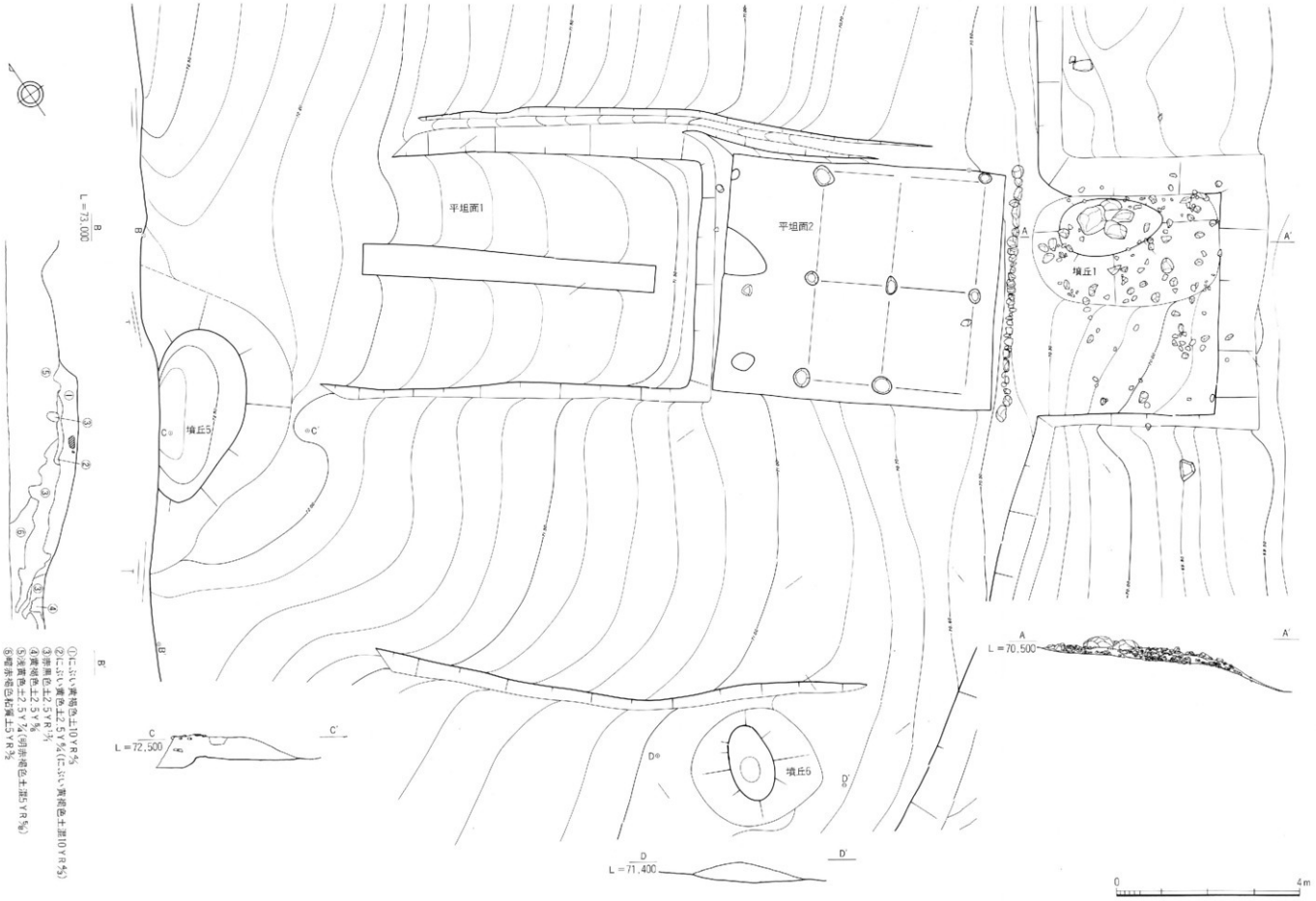


第4図　遺構実測図 (縮尺1/80)

墳丘2・墳丘3・墳丘4



第5図　遺構実測図（縮尺1/80）
平坦面6～10　遺構検出状況

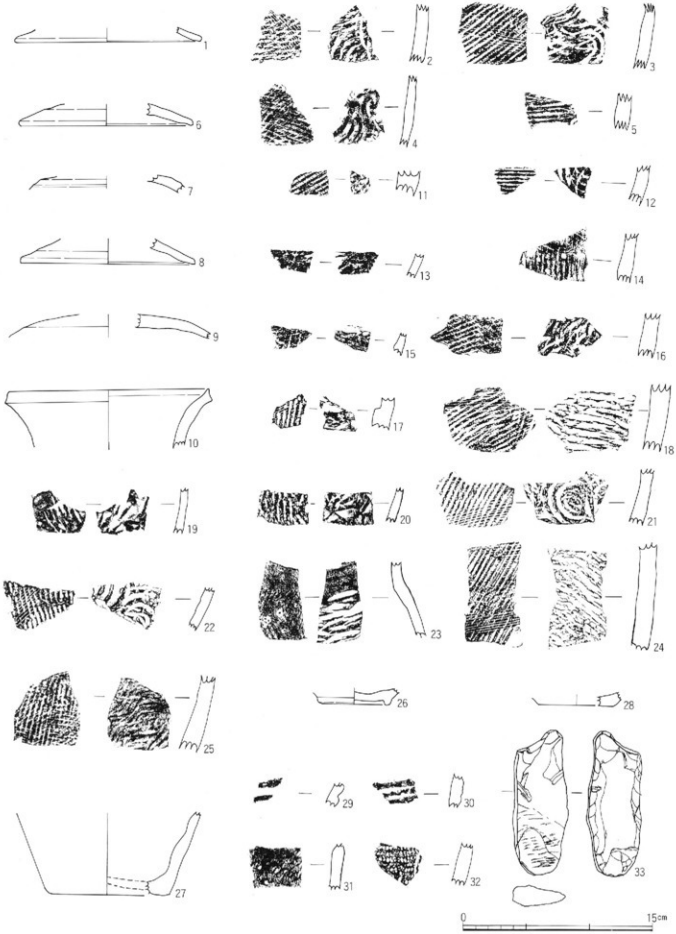


第6図　遺構実測図（縮尺1/80）

墳丘1・墳丘5・墳丘6　平坦面2遺構検出状況

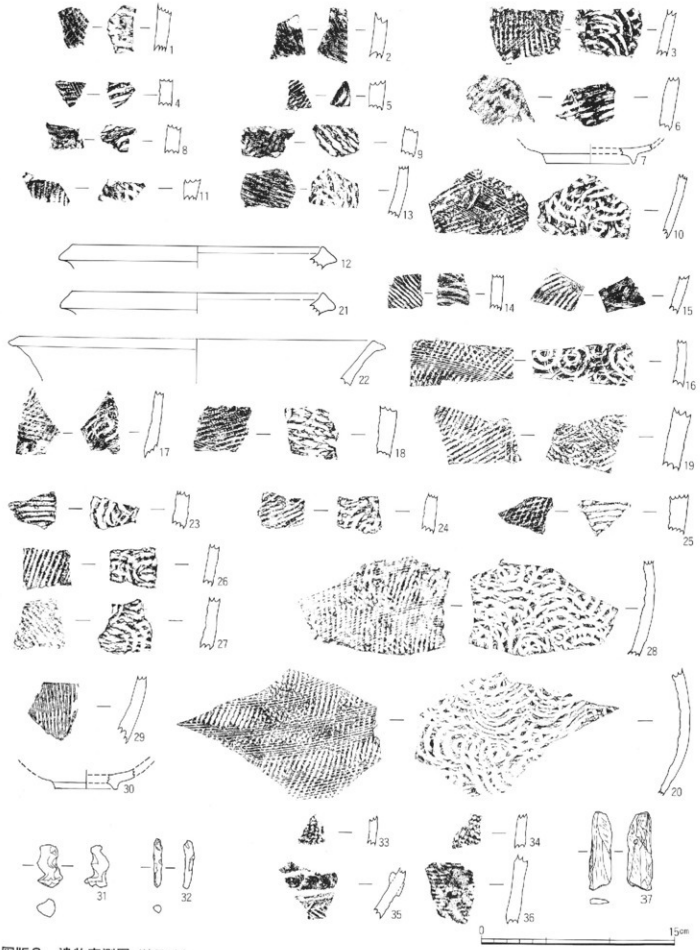
第７図　遺構実測図（縮尺1/40）
石垣遺構

図版1　黒川上山古墳群周辺航空写真（約1/6,000）



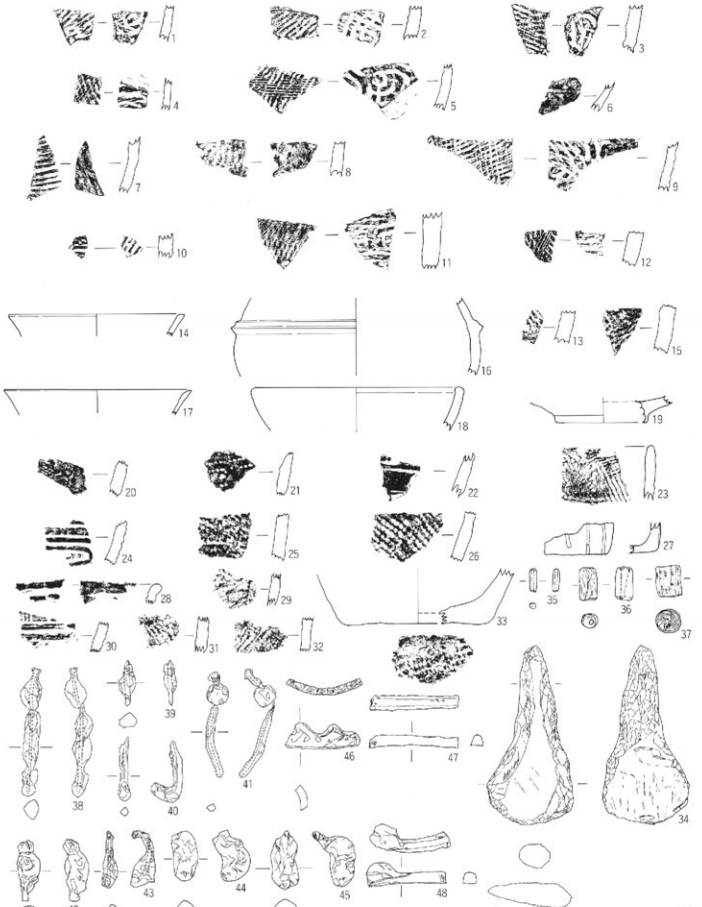
図版2　遺物実測図 (縮尺1/3)

須恵器　1～4：墳丘1，6～26：墳丘2　　珠洲　27：墳丘2
瓦質土器　5：墳丘1　　土師質皿　28：墳丘2
縄文土器　29～32：墳丘2　　石器　33：墳丘2



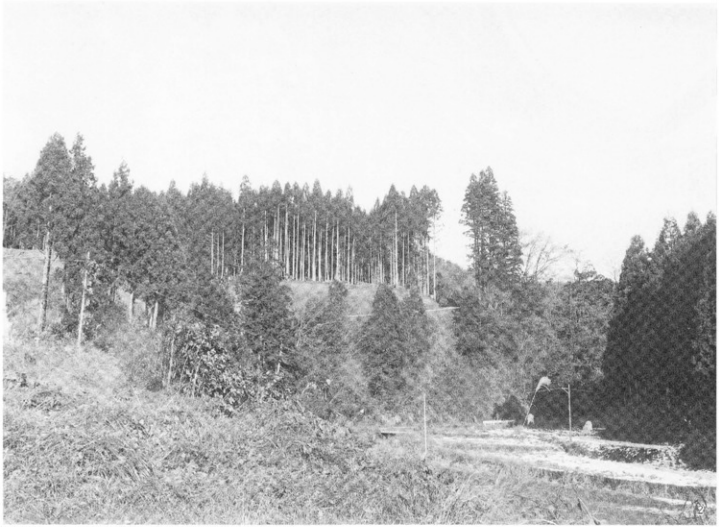
図版3　遺物実測図 (縮尺1/3)

須恵器　1～3：墳丘3，4～7：墳丘4，8～10：墳丘6，11：石列，12～20：平坦面2，21～28：平坦面1
越中瀬戸　29・30：平坦面2　　縄文土器　33・34：墳丘5，35・36：平坦面2
石器　37：平坦面2　　鉄製品　31・32：墳丘4



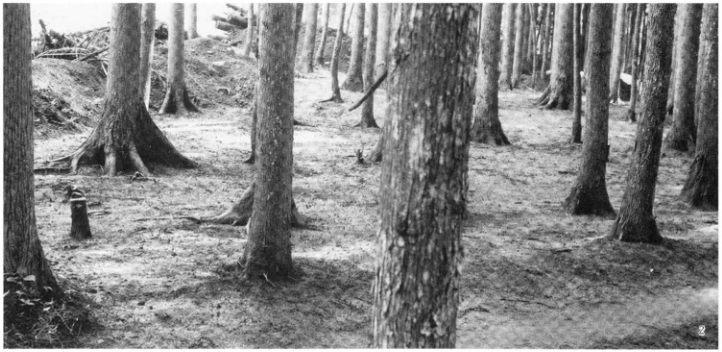
図版４　遺物実測図（縮尺1/3）

須恵器　１～３：平坦面３，４・５：平坦面４，６～９：平坦面５，10：平坦面６，11・12：平坦面８，13：平坦面９，14～16：平坦面７，17：平坦面10　越中瀬戸　18・19：遺跡東側部分　硬玉製品　35～37：平坦面３
縄文土器　20・21：平坦面10，22～24：平坦面８，25・26：平坦面９，27：平坦面６，28・29・31・32：参道，30・33：遺物東側部分　石器　34：平坦面８　鉄製品　38：平坦面３，39～45：平坦面８，46：平坦面７，47・48：参道

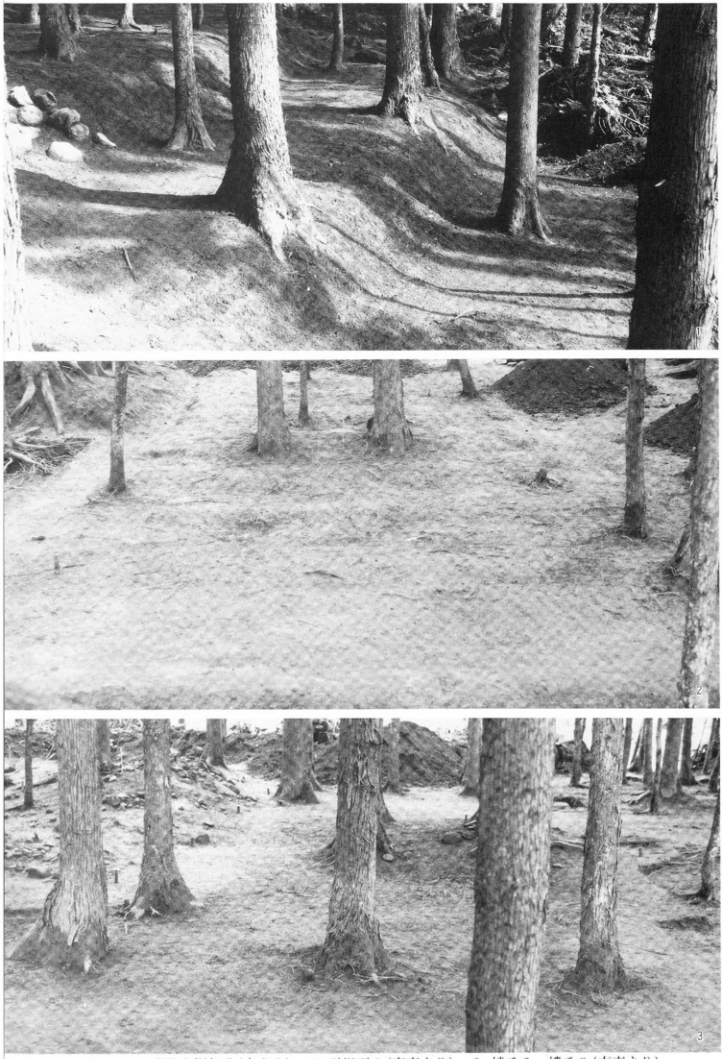


図版5　1.遺跡遠景，2.遺跡全景(南東より)

図版6　1.遺跡全景(南より)，2.遺跡遠景(空中写真)

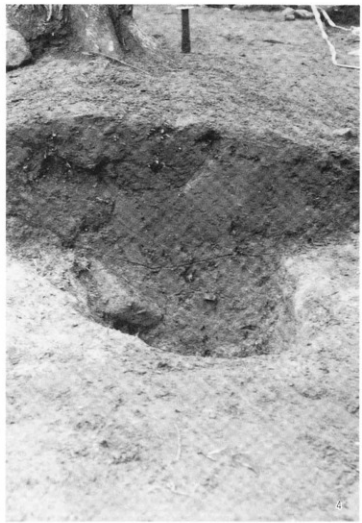


図版7　1.遺跡西側部分(南西より)，2.墳丘5遠景(南より)，3.平坦面4(南東より)

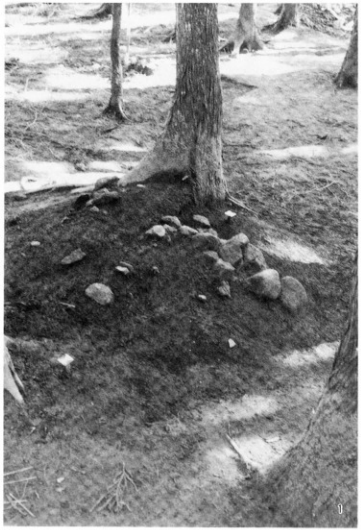


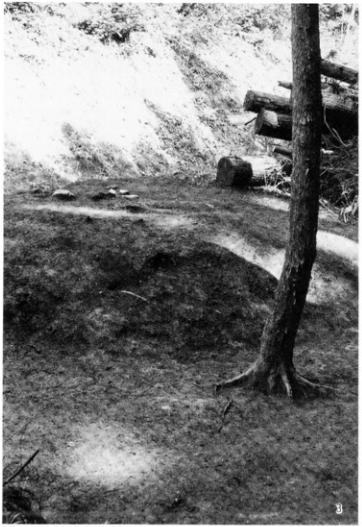
図版８　１.遺跡東側部分(南より)，２.平坦面３(南東より)，３.墳丘２・墳丘３(南東より)

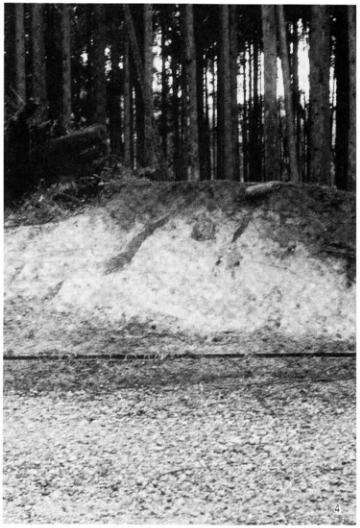
図版9　1.平坦面4前面石列(南より)，2.平坦面9(南より)，3.東側傾斜面(南西より)



図版10　1.墳丘2(東より)，2.墳丘2半截状況(北西より)，3.墳丘4(南より)，4.墳丘2断面(南西より)





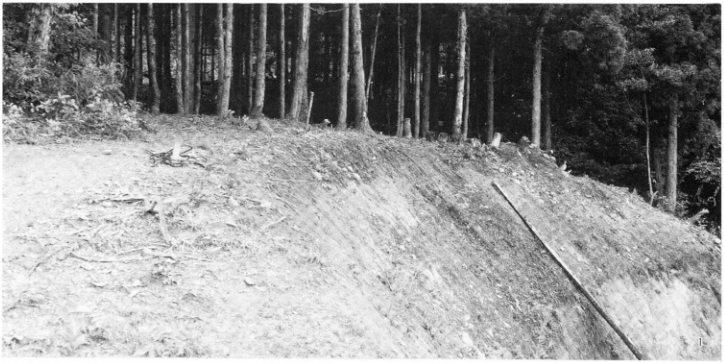


図版11　1.墳丘3(南より)，2.墳丘3半截状況(南西より)，3.墳丘5(南より)，4.墳丘5段面(西より)

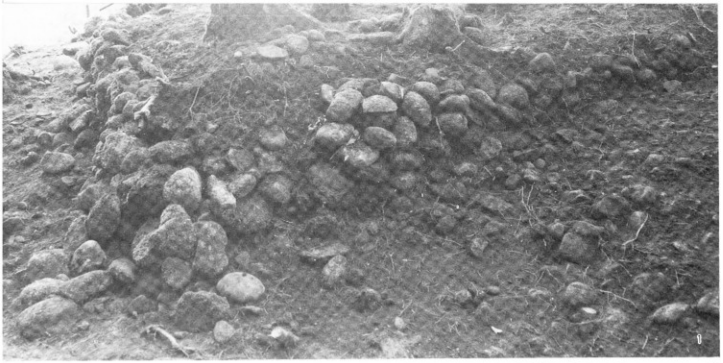
図版12　1.墳丘6(南東より)，2.平坦面2遺構検出状況(南東より)，3.平坦面2遺構検出状況(東より)

図版13　1.墳丘1(北西より)，2.墳丘1(南東より)

図版14　1．平坦面６遺構検出状況(南西より)，２．平坦面８遺構検出状況(南西より)
３．平坦面６遺構検出状況(北東より)，４．平坦面８遺構検出状況(南東より)
５．平坦面８遺構検出状況(南東より)，６．平坦面８遺構検出状況(南東より)



図版15　1.石垣遺構(南東より)，2.石垣遺構(北西より)，3.石垣遺構南側石組(北より)



図版16　1.石垣遺構(北より)，2.石垣遺構(東より)，3.作業風景